

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：32605

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23700701

研究課題名(和文)「体ほぐし」の知的教材化に資する哲学的「気づきことば」の案出と具体的授業案の創成

研究課題名(英文) Suggestion of the philosophy term to make Karada Hogushi the intellectual teaching materials and form of a concrete class

研究代表者

山口 裕貴 (YAMAGUCHI, YUKI)

桜美林大学・総合科学系・講師

研究者番号：50465811

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：「体ほぐし」の知的教材化を主たる目的に、「気」と「身」のあり方に注目する「心身一体観」の理論研究の蓄積を土台としつつ、児童生徒が「体ほぐし」をとおして獲得した「身体感覚」(「実践知」)を、「形式知」として理解および定着させられるようにするための教材的哲学用語である「気づきことば」の案出と、具体的な授業実践への応用可能な資料検討を行った。結果、「身体観」「私」「行為的直観」「フロー」「セルフ・リワードング」などを案出した。とりわけ、西田幾多郎による「行為的直観」の概念は有効教材になりうる。動きのなかにある身体、すなわち、「動きゆく私」であってはじめて知る得る事態のあることを確認した。

研究成果の概要(英文)：A purpose of this study is to assume Karada Hogushi exercise the intellectual teaching materials.As for this, a base does a theory of the outlook on one mind and body.It allows children to understand the physical sense that they got through Karada Hogushi exercise as reason.I suggested the philosophy term as the teaching materials and examined the practice document of a concrete class.I performed formulation of a result, "outlook on body", "me", "the intuition in the act", "flow", "self-rewarding".The concept of "the intuition in the act" by Kitaro Nishida can become the effective teaching materials among other things.I can know the human being by becoming a certain body in movement.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 身体教育学

キーワード：「体ほぐし」 身体論 気づき

1. 研究開始当初の背景

従来の学校体育は、「より速く、より高く、より強く、より上手に」と表現される、いわゆる競争主義や効率主義によって支持されてきた。しかし「体ほぐし」における教育的主眼はこれらと性質を異にしている。それは、「心」と「身(体)」の一体感をテーマにした、いわば「第三の運動価値論」に依拠する学習活動であり、その導入背景には、現代の子どもたちが抱える「関係性」や「身体感覚の問題」が横たわっている。つまり「体ほぐし」においては、「自己」と「他者」、その「関係性」について、「身体性」の観点から把握する「目」を子どもに与えることが必要となるのである。

本研究は、主として中等教育段階における「体ほぐし」の知的教材開発を企図している。学習指導要領に示されているある一定の教育的妥当性や、上述の先行研究者らによる「体験重視」の授業内容以外に、中等教育段階では設定されてしかるべき「体ほぐし」の教育的ポイントが存在する。それは「哲学的視座」とでもいうべきもので、簡単にいえば、生徒に「身体としての私」という意識をもたせ、自己の存在をより深部に至るまで見つめる機会をもたせる過程で、彼らが「己を知る」という点である。

2. 研究の目的

本研究は、「体ほぐしの運動」(以下「体ほぐし」と略記)の知的教材化を目的に、2008年度から科研費受給(若手B)によって進めてきた「気」と「身」のあり方に注目する「心身一体観」の理論研究の蓄積を土台としつつ、さらに、生徒が「体ほぐし」をとおして得た「身体感覚」(いわゆる「実践知」)を「形式知」として理解できるようにするための、哲学用語(身体思想)を用いた「気づきことば」の案出と、「体ほぐし」の知的教材化を促すための具体的な授業実践案を創成するものである。なお、「体づくり運動」の授業をとおして、学習者との対話・発問から多くのデータ収集が可能となる。このことを生かし、より実用性の高い教材開発を行っていく。

3. 研究の方法

理論面では、生徒の「身体感覚」を深淵かつ鋭敏にすることに役立つ「気づきことば」(哲学用語を咀嚼し、その活用法を吟味したもの)を数点案出する。理論的手掛かりには、西洋哲学(主にフランス哲学)からマルセル、メルロ＝ポンティその他、そして東洋哲学(主に京都学派)から西田幾多郎、高橋里美その他にみるキー概念(例:「純粹持続」「主客未分」)を用いる。実践面では、「体づくり運動」の授業内で、聞き取り調査を行う。そのデータを活用し、学習者が抱く「身体感覚」の実態を精査するとともに、身体思想のキー概念を援用した「気づきことば」(「どの用語をどうアレンジして伝えるか」)を創成する。

また、この「気づきことば」がより理解しやすくなると考えられる、有効性のある運動内容(「何を」)およびその方法(「どのように」)を案出する。

4. 研究成果

初年度は、「体ほぐし」の教材開発の一環である「気づきことば」として、「身体観」「私」「行為的直観」「フロー(流れ)」「セルフ・リウォーディング(内発的報酬)」などの案出および概念検討を行った。より具体的には、「身体観を醸成することの教育的意味を考える:震災後にあらためて「私」を問うこと」と題した論文において、「心理的欠乏」状態にある震災後のわれわれの生き方・あり方に関する試論として、身体教育論の見地と現象学の視点をを用い、「身体観」および「私」という論点とその概念的活用法を提示した。次に、「西田哲学の「行為的直観」にみる身体解釈の一視点-「体ほぐし」の教育的意義の理論的一根拠として-」と題した論文では、哲学者、西田幾多郎の「行為的直観」を論拠として、運動場面における視覚的把握とそれへの対処は、「動く身体によってものを見る」ことで実現可能となることを示し、「体ほぐし」に見出すべき教育的意義の論理的根拠となりうる哲学的視点を抽出した。また、「フロー経験がもたらす「自己目的」なるものの教育学的一考察-仕事と遊び及び武道とスポーツの特質解釈の過程で-」と題した論文において、フロー経験とはどういった場面において生起しうるものか、「遊び(レジャー)」と「仕事」、そして、遊び(プレイ)としての「スポーツ」と、修行としての「武道」の見地から、各々のもつフローに関連した特質を抽出し、「体ほぐし」との関連性について検討した。さらに予備的考察として、「イングランド公立学校における「体育科」の目標および内容の変遷」と題した論文で、「体育科」のそもそもの役割とは何であるか、という根本的意義論を深めた。研究発表については、上記、西田哲学の「行為的直観」に関するものを2件、「気」の思想に関して、中国洛陽にある少林寺小龍武院の気功講師へのインタビュー調査の結果をまとめたものを1件、行った。

次年度は、「体ほぐし」の知的教科化をねらいとする教材開発として、東洋思想の見地から「気づきことば」案出を行った。具体的には、和辻哲郎の倫理的論考および、三木清の情念論を援用し、子どもの心身に宿る行為的源泉の内容概観をとおして、人間発達における身体性の捉え方に関する一視点を提示した。用語として、「空間」「間柄」「パトス」「ロゴス」という概念の質的検討を教育的側面より行った。共同研究として、心理学的検討にも参加し、大学生の運動行動の促進に関する心理的な規定要因を探索するためのモデルを構成する尺度作成を試みた。特に、Health Action Process Approach Model

の基本となる「セルフ・エフィカシー」「結果予期」「リスク知覚」を測定するための指標作りを目的とした。さらに、実地調査として、フランス（パリおよびストラスブール）を訪問し、大学のスポーツ科学を専門とする教員へのインタビュー調査と、小中高の体育授業見学を行った。体育科の教員に対する、フランス教育の特徴および目的内容に関する聞き取りもあわせて行った。わが国の体育科教育には見られない、学習者主体の授業形態が随所にみられた。この授業見学で得られた「気づきことば」は、「想像性の表現媒体」「見え方の意識」「伝達手段としての身体表現」「環境相応性」である。

翌年度は、再び、心理学的検討に参加し、運動行動の変容を意図した従来のモデルの欠点を補う複合モデルを提案した。大学生を対象としたHAPAモデルを作成し、さらに体育授業への応用性を検討するため、男女別のモデルを作成して、それぞれの特徴を捉えることを目的とした。実地調査としては、アメリカ合衆国のシカゴを訪問し、公立の小学校・中学校の体育授業を見学した。あわせて各校長へのインタビュー調査も行った。規律を重視する体育のあり方は、見習うべき点が多いように思われた。具体的には、体育教師の号令や掛け声に対し、生徒らの反応がきわめて明瞭であったこと、実際に課題を遂行するなかでやってはいけないことを教師が徹底して生徒に守らせていたこと（注意を怠った生徒に対して厳格な対処を行っていた）などが挙げられる。つまり、楽しく運動をする際にも、必ず「きまり」があるのだということ、教師はないがしろ（見て見ぬふり）にせず、厳に対応していたのである。

結果的に考えが及んだことは、「体づくり運動」における「体ほぐし」の時間だけでは、哲学的側面での知的教材化は困難であるということである。その意味で、「体ほぐし」の時間後に、連続して「体育理論」の時間を設定することが有益であると考えられる。いわゆる、2コマ続きの体育である。たとえば、実際に「動く身体によってものを見る」というテーマにおいて「体ほぐし」を行い、体感的に「行為的著観」を得た後、「体育理論」につなげて、西田哲学の理論の理解へと発展させていくことができれば、きわめて有意義であろう。「気づきことば」をつかって身体知を得、のちにその知識を活用する段へと進展させるには、やはり時間をかけて確実な知識の定着（習得）を図る必要があると思われる。具体的な授業案の創成は、「体ほぐし」のみならず、「体育理論」をも巻き込んで行っていくことの重要性が確認されたといえよう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計9件)

(1) 山口裕貴、フランスにおける学校体育の実状 - パリの小・中・高の授業観察から -、体育研究 (神奈川体育学会紀要)、査読有、第47号、2014、pp.47-52

(2) 山口裕貴、サッチャリズム教育政策とその背景 - 政治経済的条件からの概観的考察 -、桜美林論考「自然科学・総合科学研究」、査読有、第5号、2014、pp.49-62

(3) 山口裕貴、人間発達における身体性の意味解釈の一視点 - 和辻・三木思想を参考にして -、体育研究 (神奈川体育学会紀要)、査読有、第46号、2013、pp.1-3

(4) 山口裕貴、戦後のイギリスにおける教育的諸状況について - サッチャー時代以前の学校制度の歴史的動向 -、桜美林論考「自然科学・総合科学研究」、査読有、第4号、2013、pp.39-52

(5) 山口裕貴、「身体」である「私」と「世界」(提言)、教育旅行研究誌「かわら版」、査読無、vol.44、2013、pp.2-3

(6) 山口裕貴、西田哲学の「行為的直観」にみる身体解釈の一視点 - 「体ほぐし」の教育的意義の理論的根拠として -、体育研究 (神奈川体育学会紀要)、査読有、第45号、2012、pp.1-4

(7) 山口裕貴、フロー経験がもたらす「自己目的的」なるものの教育学的一考察 - 仕事と遊び及び武道とスポーツの特質解釈の過程で -、桜美林論考「自然科学・総合科学研究」、査読有、第3号、2012、pp.51-62

(8) 山口裕貴、鈴木剛 著『ペダゴジーの探究-教育の思想を鍛える十四章-』(書評)、日仏教育学会年報、査読有、第18号、2012、pp.167-168

(9) 山口裕貴、イングランド公立学校における「体育科」の目標および内容の変遷、川口短大紀要、査読有、No.25、2011、pp.153-163

〔学会発表〕(計6件)

(1) 清水安夫、石井哲次、竹腰誠、後藤篤志、山口裕貴、鈴木英夫、運動行動変容モデルの体育授業への応用性の検討、第17回神奈川体育学会大会(於:神奈川大学、2013年10月19日)

(2) 清水安夫、石井哲次、竹腰誠、後藤篤志、山口裕貴、鈴木英夫、上野雄己、雨宮怜、Health Action Process Approach Modelを構成する心理的規定要因尺度の開発、第16回神奈川体育学会大会(於:関東学院大学、2012年10月21日)

(3) 山口裕貴、人間発達における身体性の捉え方に関する一視点 - 和辻・三木思想からの論及 -、教育哲学会第55回大会(於:早稲田大学、2012年9月16日)

(4) 山口裕貴、西田哲学における「行為」と「直観」の再解釈 - 「体ほぐし」で捉えるべき身体運動のあり方 -、2011年度早稲田大学教育学会(於:早稲田大学、2012年3月1日)

(5) 山口裕貴、湯浅泰雄の「気」の思想に
みる心身一如論の身体教育学的一解釈 - 少
林寺小龍武院気功教師へのインタビュー結
果を踏まえて -、第 15 回神奈川体育学会大
会(於:横浜市立大学、2011 年 11 月 12 日)

(6) 山口裕貴、西田哲学の「行為的直観」
にみる身体解釈の一視点 - 「体ほぐし」の教
育的意義への論理根拠として -、第 54 回教
育哲学会(於:上越教育大学、2011 年 10 月
16 日)

〔図書〕(計 1 件)

(1) 加藤朗、片谷教孝、山口裕貴、他、勁
草書房、東日本大震災と知の役割、2012、305、
pp.89-103

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口 裕貴 (YAMAGUCHI YUKI)
桜美林大学・総合科学系・講師
研究者番号：5 0 4 6 5 8 1 1